

# 日本イェナプラン教育協会



## ニュースレター Vol.11 2011. 9月号

発行元: 日本イェナプラン教育協会

編集: 山崎 那菜

住所: 〒155-0033

東京都世田谷区代田6-3-22-202

TEL: 070-5559-0361 FAX: 03-3466-3439

HP: <http://www.japanjenaplan.org/>

mail: [Info@japanjenaplan.org](mailto:Info@japanjenaplan.org)

ようやく暑い夏も過ぎました。秋らしく、なにか文化的なことがしたいと思いつつ、私は食に走りそうですが…  
今月は、待望のリヒテルズ直子さんの新刊も発売されます。ぜひご覧下さい！  
編集(山崎)

### 第10回

#### 子どもの態度は大人の態度の反映〜〜〜リスペクトということ

協会代表 リヒテルズ直子

リスペクト(respect)という英語の単語は、日本語には普通「尊敬」「敬意」などの言葉に訳されます。しかし、言葉というものはそれを使用している人たちの文化に密接に結びついており、日本語でただ「尊敬」「敬意」と聞くと、私たち日本人は、たぶん、ほとんど無意識のうちに、この言葉が、年上の人、地位の高い人、目上の人などに対して使われる言葉であると感じ、したがって、そういう行為や態度もまた、これらの人たちのためのものであるように考えてしまいがちです。そして、自分が、他の人よりも年上だったり、地位が高いように見えたり、目上といわれる立場にあるときには、他の人が自分に「尊敬」や「敬意」を表してくれるように知らず知らずのうちに期待してしまったりすることすらあります。

ですから、2007年に、オランダからやってきて日本で講演やワークショップをしてくれたフレークさんが、プレゼンテーションの中で、

「子どもたちをリスペクトしてください」

と言いながら、小さな子の顔を、かがみこんで下から見上げるように覗き込みながら、真剣な表情でその子の話に耳を傾けている、年配の先生の表情をプロジェクターに大きく映し出した時、

「ああ、これがリスペクトという言葉の意味なんだ」

と、何か、盲点を衝かれるような強い衝撃を心に感じたのを今も思い出します。

画一的な一斉授業方式では、教えている教員にとっては、生徒たちに一斉に語りかけている自分の言葉に生徒が注意を払ってくれることが何より大切です。生徒たちは、今頭に思い浮かべていること、心に引っかかっていることなどには、たとえそれが、前日から解けないままで気になっている算数の問題であれ、前の時間に書いていた作文の続きであれ、昨夜起きた気がかりな両親のけんかであれ、大好きなおばあちゃんの病気のことであれ、一切合財自分の考えにはとどかず『蓋』をしてしまって、今教壇で話をしている先生の言葉に注意を傾けることが求められます。

そして、こういう一斉授業の方式しか存在しないような、古い型の学校では、そういう一人ひとりの生徒の考えていることや感じていること、おかれている環境などには一切お構いなしに、つまり、一人ひとりの生徒の人間性をリスペクトするなどということなど思いもよらない状態で、むしろ、教員たちは、壇上から「こら、こつちを向け」「目上の人には尊敬の態度を払いなさい」と子どもたちの関心を自分に向けさせようと必死にならざるを得ないのです。

確かに、学級内の生徒数が多い、チームティーチングの人員もいない、教室の中にさまざまな教材をそろえて置く余裕がない、時間割や勤務評定が厳しく予定をこなすだけでへとへと、といったありとあらゆる理由が先生の方にはあるかもしれません。また、結局は、「一斉授業」が一番「効率」的だ、また、大人や目上の人たちが話をしているときにはきちんと耳を傾けられる人になってもらわなければ困る、というようなもつともらしい理屈もあちこちから聞こえてくるでしょう。

ですが、、、、元来『人の言葉に耳を傾ける』という時、それは、目上の人や年上の人、地位の高い人たちだけに対して行われればよい、そういうものでしょうか。学校できちんとした大人として行動できる人が、やがて大人になった時に、目上の人のお話は聞かすが、目下の人、年下の人、地位の低い人の言葉には耳を傾けないし、尊重の態度も取らない、などということになっても、かまわないのでしょうか。

それに、、

心に引っかかっていること、気になっていることがあるのに、それを誰にも聞かれることがないまま、ただ、教壇で、

時には眠くなるほどに「退屈な」話をしている先生のほうに、ずっと席に縛り付けられたままで注意を払い続けるなんてことが、子どもたちにできるのでしょうか。そういう学び方は、子どもたちの意欲のある学びにつながるのでしょうか。

まずは、子どもたちが、安心して授業に集中できるように、子どもたちの心理的な準備を手伝ってやるのも、教育の専門家である先生たちの仕事のひとつなのではないのでしょうか。

イエナプランで、登校時、下校時、そして授業の合間に、ことあるごとにサークルを開いてちよつとみんなでお互いの様子を見たり、何か発言して他の人と感情を分かち合う機会を作っているのは、勉強に集中するためのクッション、子どもたちが、クラスルームという場を、家庭のように安心して過ごせる場として感じ、また、そういう場を自分も一緒に作るうとするための時間なのです。

フレークさんが先に挙げたプレゼンテーションの写真  
を会場の人たちに見せた時、彼は、

「子どもたちを一人ひとりリスペクトしてください。あなたがリスペクトされたいなら、まずあなたが子どもたちをリスペクトしてください。そうすれば子どもたちは、あなたのことをリスペクトします。」

そうっていました。

思い出してみてください。皆さんには、かつて、子ども時代に接したことのある大人たちの中に、「この人には本当にたくさんのことを教えてもらった」「この人は私の人生にとってはなくてはならぬ人だった」「この人のおかげで今の私がある」というような人が、一人か二人いるのではないのでしょうか。それは、学校で出会った先生かもしれないし、近所にいた大人だったかもしれません。その人たちは、いったい、どんな人たちだったのでしょうか？ その人たちの性格や態度を形容詞で表すとすると、どんな言葉が最もふさわしいでしょうか。

その人たちは、当時、子どもだった私たちに対して、自分の地位や能力や立場などには頓着せず、むしろ子どもだった私たちの性格や能力を誉め、励ましてくれた人たちではなかったでしょうか。そうして、だからこそ、私たちは、そうしてくれたこの人たちを、今も、「大切な心に残る大人」「尊敬できる大人」として覚えているのではないのでしょうか。

イエナプランの学校では、大人も子どもも、皆、人間としては平等な存在としてみなされています。だから、クラス担任の教員も「先生(マスター)」という語では呼ばず、グループリーダーという言葉で表現することにしています。オランダの小学校では、クラスの担任の先生をファーストネームで呼んでいる子どもたちも少なくありません。

でも、だからと言って、子どもたちが先生を子どもの一人だと思っているわけではないのです。大人らしい態度で子どもたちを見守っている先生は、だからこそ尊敬されるのです。

もしも子どもたちが『リスペクト』しあえない状態にあるのだとしたら、それは、もしかししたら、その子どもたちに関わっている私たち大人が、子どもを1人前の人間として待遇せず、子どもの言葉にしっかり耳を傾けず、大人の、その場の都合で無理やりに引き回しているから、であるかもしれません。

学校は、それぞれのこどもが最大限に能力を発達させ、それぞれの能力を生かして社会に貢献できるように育てられる場です。学校では、教員や保護者など、大人の気分や仕事の都合などのために、子どもが安心して学び発達する権利が奪われる理由はあるはずではないはず。



イエナプラン・アドバイス&スクーリング(JAS)の  
フレーク・フェルトハウズ(Freek Veldhuisz)さんの  
プレゼンテーションより



～新刊のご案内～

『祖國よ、安心と幸せの国となれ』 1470円

オランダ社会が実現してきた、共生、多様性、平等性、市民社会が持つ民主主義と安心、幸せの原理... 日本を創り変えたいと願うすべての人に贈る、復興と再生へのビジョン。

古い社会に戻すか、新しい未来をこじあけるか、日本の針路を問う、待望の力作。

【株式会社ほんの木】

TEL:03-3291-3011

メール:info@honnoki.co.jp

## シリーズ:

### ケース・ボット(Kees Both)先生のイェナプラントの出会いと歩み(その1)

ケース・ボット先生といえば、オランダでの70年代以降のイェナプラン教育の発展にとってなくてはならない大切な専門家の一人。とりわけワールドオリエンテーションの教材開発では、「国立カリキュラム研究所(SLO)」でイェナプランの理念に従って取り組み、オランダ国内の総合学習の流れに影響を与えるほか、長く、オランダ・イェナプラン教育の研究代表者を務め、20の原則の草案にも中心となってかかわった方です。また、イェナプラン教育の教科書として、ペーターセンの「小さなイェナプラン」と同じくらいに重要な「イェナプラン21」という著作を執筆されています。この本は、イェナプラン発祥の国ドイツでも翻訳され、イェナプラン関係者に高く評価されているものです。新しいシリーズは、1997年にオランダ・イェナプラン教育協会(NJPV)の機関誌Mensen-Kinderenに掲載された、ボット先生へのインタビューの記録です。まだ、オランダでもイェナプラン教育があまり広く知られていなかった頃、偶然のきっかけでイェナプランと出会い、以後、イェナプラン教育の推進者として活動された先生の歩みは、今、日本で、イェナプランと出会い、日本の子どもたちの未来のために、その発展を願う皆さんにとっても多くの示唆を与えてくれるものと思います。

リヒテルズ直子

#### イェナプランとの出会い

##### Q. そもそも、どんな経緯でイェナプラン教育に出会われたのですか？

A. 理科教育がきっかけでした。スース・フロイデンタールが、私のイェナプランとの出会いに重要な役割を果たしています。学生時代、私は一度もイェナプラン教育とか、ペーターセンという語を聞いたことがありませんでした。ですから、考えてみれば不思議な巡り合わせだったといえます。私は、(スースが住んでいた)ユトレヒトの学校に通っていましたし、それは、ニュー・ギニア通りにある(スースが作ったオランダ初の)イェナプラン校から、わずか2百メートルくらいしか離れていなかったのですから。私は、教員養成校を出てから1年間、球根栽培地域で有名な、ある、とても保守的なプロテスタントのキリスト教系小学校で働きました。この時期は、私にとっても大変苦しい時期でした。それは新米教師が、いかに学校で受け入れられなかったかということを示す格好の例であったといってもいいと思います。新米教師はクラスを受け持たされましたが、それは、1年間の間に何と3人目の教師で、しかも、誰もわたしに何のコーチングもしてくれなかったんですから。(私の同僚はいい人たちでしたし)悪気はなかったのだと思いますが、新米教師をそんな風に放り出すなんて、実に無責任なことだと思いました。それから、私はハルダーウェイクにいきました。そこで、私は、かなり保守的な高齢の校長の元で働きました。けれども、この校長は、私に、自分なりのやり方でやったり、学校の中で新しいことに取り組んでみたりするゆとりを与えてくれました。その点では、私は、今もこの校長に感謝しています。彼は自分ではいろいろなことを夢想してみるだけの力はなかったのですが、その代わりに他の人がそういうことをやってみる余裕を与えてくれました。この学校で、私は2年間、学級担任をしました。

まあ、そういうことを何回か繰り返しているうちに、教育というものについて考えるとき、厳格な学年制度で組織企画してしまうのではなく、なにかもっと別のやり方があるはずだ、と思うようになりました。それから、クラス担任をやらずに、学校の中の一般的な役職にも何年間かつきました。だんだんに自然とそうなっていったのです。ある時、あるクラスの人数が大きくなりすぎたというので、クラスを分けるために、ホールに子どもたちを座らせました。その時に、監督局のインスペクターの女性が来ていて、

「ケース・ボットにレメディアル・ティーチング(矯正個別指導教員)とかその他の特別の役割を担ってもらえば、このグループを二つに分けずにも済むのではないですか」

といったんです。そのおかげで、子どもたちのグループを分ける必要がなくなり、問題が実に気持ち良く解決したのです。どうやら、インスペクターの女性の目には、私とその仕事に相応しい人間だと映っていたらしいのです。

そこで、特別支援教育を担当しながら、わたしは、グループ3からグループ8までの子どもたちに、理科教育を専門に担当することとなりました。そのほかに、高学年のクラスを担当して、その学校の校長の仕事軽減するための仕事も手伝っていました。この時のことについては、当時のイェナプラン教育協会の機関誌ペドモルフオーゼの中に、「ケース・ボット、ハルダーウェイクの特別専門教師」という記事があります。

私はこの学校に8年間勤めましたが、そのうちの4年間は、こんな風に、自分の担当クラスは持たずに、特別専門教師として働いていました。当時のことを思い出すと、あれでよかったなという気持ちと、でも、やっぱり自分の担任クラスを持っていたかったな、と思う気持ちと両方があります。

##### Q. 自分の担任クラスを持っていた頃のことは懐かしいですか。

A. それはとても懐かしいです。その学校でも最後の2年間は自分の担任クラスを持っていたので、すごく楽しかった。それまでの私の仕事の時間割だと、自分が理科なら理科の科目教員として子どもたちに教えていても、3時になったらほかの同僚がやってきて、交代となる。自分ではまだ終わったという気持ちの準備がなくても、また、早く終わってしまうことも時にはあります。だから、私はいつも、科目専門の教員という立場にあることについて、二律背反的な気分がありました。一方では、自分が得意な、やりたいことをやれるし、そうすることで、子どもたちもたくさん学べる。けれども、同時に、クラスの中で起きる日常的な出来事からは離れてしまっている。それは危険なことでもあるのです。

まあ、いずれにしても、こんな風にして、私は、自分自身、とてもいろいろなことを学びながら成長してきたと思っています。私は、そういう立場にあって、学校全体を大きく変えることもできた。ほかの人が面倒だとか邪魔なことだと感じ

ない限り、何でもできたわけですから。子どもたちはとにかくやる気満々だった。特に、理科の学びには熱心でした。私たちは子どもたちと一緒に戸外に出て、鳥の巣箱を木にかけたり、池の様子を眺めたり、朝早く鳥を観察に行ったり、それから、とてもたくさんの物理実験なども子どもたちと一緒にやりました。例えば、「音」というテーマで勉強をしたときには、子どもたちは、学校のありとあらゆるコーナーや、穴があいているところなどで、実験に取り組んでいました。また、自分のクラスの子どもたちと一緒に歌を歌いましたし、他のクラスの子どもたちと一緒に催しもやりました。週末のミニ学芸会という習慣は、私がおの頃取り入れたものです。講堂に行き、全学校の生徒たちと一緒にやったり、高学年の子どもたちだけとやったり、

そんなわけで、とにかくできることは何でもやってみました。当時はまだ学年制のクラス制度ではあったけれども、同僚からもそれなりに理解されていたと思います。

#### Q.どのクラスを担当していたのですか？

A.私は中学年のグループを担当していましたが、グループ8[小学校6年生]を担当したこともありました。幼児クラス以外は全学年やったことがあります。でも一番多かったのは、グループ3とグループ4[小学校1年生と2年生]でした。(今はグループ5とグループ6:3年生と4年生)何とも言いえない素敵な年齢だね、この年齢は。子どもたちは、とてもたくさんのお話を聞きたくてしょうがないんだ。とにかく「真実を知りたい」というような年齢だね。だから、ワールドオリエンテーションをやるにはもってこいの年齢なんだ。あの年齢の子どもたちと一緒にいると、ほんとうに心をすっかり奪われてしまう。どの科目の授業もとても楽しかった。WISKOBASという算数のメソッドが当時始まったばかりで、私は、すぐにそれを自分の教育に取り入れました。初等教育の内容はとても広いので、私は、自分の個人的な立場からも多くの刺激的な経験を積むことができたし、それがまた、小学校で働くということの大きな利点だとも思っています。



ケース・ボット(Kees Both):フレックさんのプレゼンテーションより

#### Q.理科の授業の中身や週末のミニ学芸会などについては、どうして知るようになったのですか？当時はまだイェナプラン教育は知られていなかったのでしょうか？

A.確かにまだイェナプランは知られていませんでした。私は、個人的に、自然にとっても関心が強かった。それは、教員養成校の時からそうだったと思います。もしかするともっと前からだったかも。ボーイスカウトの時からかもしれない。とにかく戸外にすることが好きだった。若い時には、自然研究青年グループに属していたこともありました。だから、自然に触れるというような趣味は、教員養成時代からずっと続いていました。そして、そういうことがきっかけで、学校の中でも自然に関する勉強に関心が強かった。

音楽は、育ちのせいかな。多分血なんでしょう。僕の父はとても歌がうまかったから。小学校時代に僕はよく歌を歌っていたし、学校の先生たちも僕たちとよく歌っていた。中学の時もそうだった。ボーイスカウトでもね。それは、キャンプファイアーをしながら歌う歌だったけどね。それから、自然研究青年グループでもよく歌いました。これは、1920年代からのワンダーフォーゲルの伝統ですね。それから、これはどうでも良いことだけど、うちの子どもたちがオランダ自然研究青年協会に入っていた時も、一緒によく歌っていました。

だから、学校でも子どもたちとよく音楽の勉強をやりました。そして、それを、週末のミニ学芸会でよく使いました。プロテスタントのキリスト教の学校の時代には、週末のミニ学芸会は宗教教育にも関係があって、週のテーマがあり、「週の歌」があって、それをよく練習していました。でも、私たちは、教会の聖歌隊のような深刻なことをしていたわけではないんですよ。例えば、聖書の話をもとに人形劇をしたりなんかしていました。エスタという、ペルシャの宮廷の(ユダヤ人の)女王様の話とか、後でわかるんだけど、モデルチャイとか、ユダヤ人嫌いの人たちが出てきたりする話をね、人形劇でやっていた。音楽をたくさん使い、歌もたくさん歌いました。そんな風にハルダウエイクでは楽しいことが結構いっぱいあったんだけど、あまり、軽快な気分の学校としては知られてなかったようだね。私自身は、そういう学校ではあったけれども、結構いろんなことをやることができた。

そうこうするうちに、現職に就きながら、教育学の修士課程を修めることになった。とにかく何でもかんでも学んでみたいというのがなかった。とくに生物学に関心があったんだけど、それだけに6年間全部をかけるのはどんなものか、一旦入り込んだら、その外には出られそうもない。それはごめんだ、と思って、地理をやりたいと思った。文化人類学などにはとても興味があったしね、...

しかしある時、私は、「いやいや、少し現実的になるべきなんじゃないかな。少し欲張りすぎているみたいだ。それより英語をきちんと学び直そう」なんて思っただ。

そこで、1年かけて英語をやりました、すごく楽しかったけど、それで中学の英語教師になろうとは思わなかった。そんなのはとてもじゃないがごめんだ、ってね。たった一つの科目だけを教えて、しかも、毎時間ごとに違う子どもたちに教えるなんて、自分には到底できっこないと思った。私は言葉が好きだったし、言葉を学ぶのに困難は感じなかったけれども、

やっぱり教育学を学ぼうと思った。そして、ある時点では、はっきりと、それが私に一番向いている、そう納得したんだよ。教育学を学んでいた時も、私は、いろいろなことを組み合わせてやっていました。自然に触れるための趣味と教育学と学校での仕事と、、、。理科教育についての論文のテーマを選ぶとき、JSWという機関紙の中であることを見つけました。それは、イギリスとアメリカで始まった新しいプログラムのことでした。彼らはそれをまだ『科学』としか呼んでいなかったし、その時点では、まだ、オランダでもほんのわずかの人がそれについて知らなかった。初等教育関係者など全く知らなかったはずです。

データを集めようと思って、私は、オランダ全土の半分くらいに電話を掛けてみたんだ。誰か知っている人がいるのではないかと、と手当たり次第に電話をかけてみて、そこからヒントを得てまた次の人にかける、という具合に。そうしていると、いつの間にか、輪が一つになって元のところに戻ってくるんだ。そんな風にして、オランダでは『科学』についてどんな人がどんな風に考えているのかが大体わかってしまった。そのうちに、この分野の知識についてはもう大体「全部」分かったな、という気分になってきたわけです。だけど、たった一つのことだけがまだわからなかった。この科学というものについて、教育学的な文脈ではどう取り上げているのか、ということがほとんどといっていいくらいわからなかった。



オランダイエナプラン教育の機関誌Mensen-Kinderenの1997年Nov号に掲載された、ケース・ポットさんの若い頃の写真。

ち自身にいろいろなことを自分でやらせています。鳥を観察したり、キャビアの研究をさせたり。どんなものを好んで食べるかとかですね。それから、毛虫を飼わせたりもしています。それから、子どもたちと一緒に物理アクティビティもしています。でも、私は今、イギリスの教育がどうなっているのか知りたいんです」

そういう私に返ってきた答えは、まるで、思いもかけないものだった。彼女はこういうんだね、「ベドモルフォーゼという雑誌について聞いたことがありますか」<sup>[1]</sup>

って。

「いいえ」

と僕は答えました、何しろ、全く聞いたこともない話だったから。それに、当時この雑誌はまだ刊行されてから間もなかったしね。

「実はね、あなたがいま言ったこと、そういうことについて、私たちは、記事を書いたばかりなんですよ」って。

そしてそれが「ライオン蟻に聞いてごらん」という記事だったんだ。

というわけでね、まあ、そんな風に始まったわけだね。それからすぐに私は、フロイデンタール夫人に会いに行きました。それが彼女のユトレヒト、シューベルト通44番にあった有名な彼女の家だったんだ。そこで、自然教育についてのたくさんの文献も見せてもらいました。他では見つからない雑誌類だとか、本だとか。スースはいい嗅覚をもっていた、何が学校にとって重要なのかについてね。そして、それは、ぼくにとってはまるで金鉱山かのような「宝の山」だった。私は、その文献を使ってよいといわれたけれども、彼女はこういうんだ

#### Q.その当時の科学っていうのは何だったんですか？

A.まあ、今でいう「自然教育」というようなものかなあ。全体としてまとめられた自然教育、理科教育だな。残念ながらオランダ語には適切な語がなくて、私たちは、それを後から見つけ出すことになるんだけどね。ある時期には、私は、それを、ワールドオリエンテーションの一部として、自然オリエンテーションと呼んでいたことがある。そういう呼び方はオランダでも新しかったんだよ。「自然史」とか、物理学実験とかはあったけどね。とにかく、全体的に統合されていて、アクティブで、探究的で、そういうものが子どものために作られているというのを、私は、その時にやっと発見した。

ある時、私は、図書館にいて本を借りてきた。その本は『明日の学校のために』というタイトルの本で、フロイデンタール・ルッターという女性を書いたものだった。この女性の名前を、私はそれまでまだ聞いたことがなかった。でも、この本の内容は私が興味を抱いていたことに、まさにズバリあっていて、しかも、その中で、彼女は、イギリスの教育についてたくさん書いていたんです。面白いことに、当時、私は、彼女が書いているペーターセンとかイエナプランとかにはあまり関心がなくて、むしろ、「遊びながら学ぶ」とか「やりながら学ぶ」というようなイギリスの教育のほうに関心を持っていたんだよ。わたしは、「この女性はそれについてたくさん知っているぞ」と思ったんです。そして、よし、彼女に一度電話してみよう、ってね。

#### Q.それは何年のことですか？

A.1971年の初めのことです。今でもとてもよく覚えていますよ。水曜日の午後だったな、私がフロイデンタール夫人に電話をしたのは。そうして、私は、フロイデンタール夫人にこう質問をしました。「私は、科学で、自然オリエンテーションというような、子ども自身による探究的な学習について調べているんです。私は、子どもた

「そのかわり、ペドモルフォーゼに記事を書いてください」

とね。そういうことで、私は、ペドモルフォーゼに記事を書き始めたんだ。そうして、私は、ライオン蟻に聞いてごらんの話

を模範にして、まず「キャビアに聞いてごらん」という記事を書いた。

私は、子どもたちを相手によく同じようなことをしていたんです。動物は何が好きか、を調べてみるとかね。それで、私

たちは、また小研究を始めた。そうして2番目に書いた記事が「小鳥に聞いてごらん」という記事。冬に小鳥たちの観察

をするというものでした。3番目が「毛虫に聞いてごらん」これは、「アンキーと毛虫たち」という小さな本を書きかけと

なったものです。

そのうち、次第に、こういう問題に近づいていくんです。

「どうやったら賢い問いかけができるだろう？つまり、動物や物事や植物が自分で答えを出してくれるような質問はなん

だろう？」とね。

スース・フロイデンタールとの出会いは、私自身の成長にとってとても大きな意味のあるものでした。それから、ヨス・エ

ルストヘースト(その時は私たちはまだ知らなかったのだけど、ライオン蟻に聞いてごらんという記事は彼が書いたもの

だった)も私のものの考え方や行動の仕方にとっても強い影響を与えてくれました。

11 ペドモルフォーゼは、オランダでイエナプランが紹介された後、スース・フロイデンタールが中心になって作ったイエ

ナプラン財団が発行していた機関誌で、初期のオランダ・イエナプラン教育の共同研究氏の役割を果たしていた(リヒ

テルズ)。

先月号に引き続き、8月4日のリヒテルズ直子さんのワークショップ『先生の学校～イエナプラン教育を体感する～』（共催 NPO法人Educational-Future-Center）にお寄せいただいた、みなさんのご意見・ご質問をご紹介します。

11月の帰国に合わせ、20日(日)には、日本イエナプラン教育協会総会とワールドオリエンテーションをテーマにしたワークショップを予定しております。どうぞお楽しみに！

## ワークショップの感想

・本で読むだけでは分からない事を多く知ることが出来た。考え方は貴重だった。ワールドオリエンテーションは出だしだけでも実際にやってみたかった。

・新たな視点を獲得できた事。真剣に教育を考えている人に出会えた事がとても良かったです。

・1日のリズムなどを体感でき、とても充実した時間になりました。

・すごく楽しかったです。特にサークルを作るということが新鮮でその効果を実感しました。ありがとうございました。

・教師としての自分の立ち位置を振り返る事ができました。教師に求められる事、教師の可能性をこれから掘り下げていけたらと思います。

・自分で参加、体験した活動はやっぱり印象に残っています。他の参加者と関わりながら学ぶ事は一人で考えるよりも深く豊かに学べる事を実感しました。

・日本の教育を変えるのは今しかない、今が最後のチャンスというのはよく分かりました。行動していこうと思います。

・イエナプランの基本的な事を体感を通してリヒテルズさんから学ぶ事ができて良かったです。今日の学びを本と結びつけたり2学期に実践したりして子ども達が社会人として自立した学び手になるよう努力していきたいと思っています。

・午前中からびっちり沢山inputされたなあ～と思います。正直お尻が痛くなるほどでした。笑。今回ワークショップという事で体験的に学ぶ事ができた部分ともしっかり体験したかったなあ～という名残惜しい部分があり、これからの意欲につながったと思います。そして自分で実践して学びを深めたいと思います。

・ブロックアワーの使い方、子ども達自らがどの様に学びを進めていくのか、プロセスを見たいと思いました。

・イエナプランの有効性が確信できました。公立学校で取り組むのは難しいけれど担任の意識だけで考えられる事も少しある事が分かりました。

# シリーズ ～オランダ・イエナプラン校訪問レポート・2008～

## 第1回

久保 礼子（日本イエナプラン教育協会福岡支部代表）

### 1. はじめに

2008年3月、オランダのロッテルダム市郊外にあるイエナプラン校を訪問する機会を得た。当時、私は「自己啓発のための休職制度」(無給)を使って、福岡教育大学修士課程に所属していた。教師を続ける中で私の中にたまっていた、たくさん問いとゆっくり向き合う時間が欲しかったのだ。時間に余裕があったおかげで、2008年3月10日(月)～15日(金)にかけての1週間、まるで教育実習生のようにひとつのクラスで過ごさせていただき、イエナプラン校での教育実践を観察させてもらうことができた。さらには、翌週にドイツのミュンヘン大学で開かれたイエナプラン教員養成の短期研修(4日間)にも参加でき、学校教育の本質を深く考えさせられる本当に貴重な研修をさせてもらった。これらの報告はいろいろな場所でさせていただいてきたが、今回、このニュースレターでも書かせていただくことになった。

オランダ訪問にあたり、私が知りたかったことは、主に次のようなものだった。

#### ①サークル対話のあり方

- ・教師の係わり方 どのくらいリーダーシップをとっているか。テーマはどう決める？
- ・子ども同士の係わり方 聴き方、話し方、やりとりの仕方。マニュアルがあるのか。

#### ②学習の仕方

- ・自学学習 課題(教材)はどんな風に準備するか。それぞれ異なった課題(教材)をどのように与えるか。わからないときはどうするか。やる気のない時はどうするか
- ・協同学習 教え合いが頼り合い、おしゃべりにならないか。リーダー的役割を持つ子どもを、特に意識して配置したり、その役割を意図的に負わせたりするか。リーダーを特別に訓練したりするか。

#### ③ワールドオリエンテーションについて

- ・どのくらい時間をかけているか。(1日のうち、1週間のうち、1年のうち)
- ・実際の子どもの姿(やらされてる感は？一人ひとりがめあてを持っているのか。)
- ・実際の教材をみたい

#### ④行事について

- ・どのくらいの頻度で行われるか。
- ・どのくらいの準備で行われるか。
- ・教師はどのくらいかわるか。

#### ⑤規律をどう教えているのか。

#### ⑥評価の仕方 その場では？ 一定の期間の中では？ 通知票はどんなものか。

#### ⑦オランダの中等教育のあり方はどうか。

#### ⑧教育サポート機関の実際 施設の様子(建物・広さ・教材)職員の仕事や教師とのつながり

言葉の問題があり、なかなか見えてこない部分はたくさんあった。たまたまヒテルズさんが来校されていて通訳して下さった時は、より深く質問したり理解したりできラッキー！！だったが、あとは私のたどたどしい英語力のみだったのは残念…。オランダ語がわかり子ども同士のやりとりがわかると、もっともとおもしろかったです。それでも、子どもの活動を重視するイエナプラン校では、ずっと教室で子どもの姿を観察することだけを通して、実にたくさんのが見えてきた。③、⑦、⑧以外については、かなり自分の問いを満足させることができたと思う。

では、何回かに渡ってそれらを少しずつ報告させていただきます。

### 2. 学校の概要

2007年11月に日本に講演とワークショップに来てくださったリンさんが校長先生をされている小学校 Dr.Schaepmanschoolにお世話になった。1クラス25～30人、全校220人ほどの小規模の学校で、もちろん異年齢クラスである。

低学年クラス(4歳～6歳) 3クラス
中学年クラス(7歳～9歳) 4クラス
高学年クラス(10歳～12歳)3クラス

職員数 16名
副校長1人、担任10人、IB1人、
補助(パートタイムを含む)3人、用務員1人

この規模はオランダでは平均的だそう。オランダはこうした規模の学校が地域にたくさんあり、保護者は自分の子どもにあった学校を選択し、子どもをそこに通わせると聞いていた。実際、最寄りのバス停から学校まで5分ほど歩く間に、4校も小学校があり驚いた。

下の資料は、私が1週間滞在したときの流れをまとめたものである。イェナプラン校が、4つの活動を組み合わせていることがよく読み取れる。

	月	火	水	木	金
8:30	オリエンテーション	サークル対話	小さな発表会	サークル対話	数学
9:00	ブロックアワー	ブロックアワー	ブロックアワー	ブロックアワー	体育
10:00	自由時間				
	おやつタイム				
	外遊び				
11:00	ブロックアワー	ブロックアワー 体育	ブロックアワー ワールドオリエンテーション	ブロックアワー	ブロックアワー
12:00	外遊び		サークル対話	外遊び	
	昼食			昼食	
13:00	本読み	本読み		パンケーキ	図工
14:00	ワールドオリエンテーション	ワールドオリエンテーション		ワールドオリエンテーション	催し
	サークル対話			サークル対話	



訪問校のロゴマーク



校舎の周りはこんなきれいな風景

まずは、この流れの中で私が見たり感じたりしたことを紹介していきます。

#### (1)サークル対話

- ・担任の周りに丸くなって座りみんなで話をする。
- ・朝、休憩前後、昼食前後、終了前、と節目節目に集り、学校生活の中核を成していた。時間は5分から30分ぐらいと様々で、15分ぐらいが平均的だった。
- ・守るべきルールとしてあるのは、人が話している時に口をはさまない、話している相手を尊重して耳を傾ける、ということ。



サークル対話の一コマ 中学年

★教師も生徒もとても静かな声で話し、それに27名の子どもが皆、静かに耳を傾けていることが印象的だった。話したい子どもが手をあげ、担任が指名すると話すことができる。ごく自然にいろいろな子どもが手をあげ、質問や感想などを率直に伝えている様子だった。

★サークルに出入りする場合も静かに動く。6歳の子どもが私の耳元で“excuse me”とささやいて道をあげてもらい、目をみてにっこり“thank you”とまたささやいてサークルに入ってしまったのにはびっくりした。出入りは自分の判断で行う。

★口を挟むことや嘲笑は、厳しく注意される。話すことはその子どもにとって心地よいものであるべきで、それを尊重することは周りの子どもたちが必ずしなければいけないことだと若い担任の先生はおっしゃっていた。こうやって、自分の考えや感情を言葉にして人に伝える練習をこの学校では積み重ねていっているのだそう。

★水曜日の朝のサークル対話の時間は、二人の子どもが本の読み聞かせをすることになっていた。読み終わると、本の内容に関するクイズや質問をみんなにしたり、みんなからコメントをもらったりする流れの会だった。その朝は、本を読む子どもの母親とお兄ちゃんもサークルに参加していて、最後に皆の前で、感想を伝え良かったとほめてハグをして帰っていった。朝の20分間ほどのできごとだったが、とても暖かい空気が教室全体に流れた。本を読んだ子どもはとてもうれしそうな様子だった。学校と家庭とが同じ歩調でその子の発達にかかわるというスタンスが伝わってきた。



## (2)学習(仕事)

- ・自学学習が基本。体育、音楽、図工などの実技教科と、計算、本読み、総合学習は全員同じ時間に取り組むが、ブロックアワーという1.5～2時間のまとまった時間には自分の計画にのっとって自分で学習をすすめていく。
- ・子どもたちは、1日の学習内容が書かれた1週間分のスケジュール表を持っていて、それを見ながら自分で計画的にやり遂げていく。やり終えたところには色を塗る。
- ・担任は、年齢に応じたスケジュール表をつくり、月曜日のスタートに子どもたちに配布し1週間の見通しを持たせる。個別に内容を付け加えたり、変更したりすることもある。高学年になると、自分で書き込む部分が多くなる。
- ・その日の学習内容は与えられているが、どれから始めるか、どんなやりかたでそれをするかは、それぞれ子どもたちが自分の選択で行なう。



ペアでの学習風景



机の上には各自のスケジュール表が

教師の説明は、教師のまわりに年齢ごとに子どもを集めておこなわれる。ひとりの子どものついてみると、1日の内、1～2回程度。しかも、導入うんぬんは全くなく、いきなり本論でわずか10分ほどで終わる。分かった子どもはさっさと自分の席に戻り、練習問題を始める。分からなかった子どもは、もう一度説明を受け、わかったら自分の席へ。まだわからなかったら残って、先生とマンツーマンになることもよくある。



自主学習が基本

★教師がどう教えるかの工夫より、個々の子どもがどの程度理解しているかに教師の関心はあると気づいた。「これを教えるのにたった10分でいいのか」と尋ねると、「教科書に書いてあるでしょう。教科書は、自分で読めばだいたいわかるようにできているのだから。つまずきそうなところはあるので、そこを説明しているだけ。教師が教科書を隅から隅まで教える必要はない。理解の速さはそれぞれ違うので、分かっている子を退屈させてはいけなし、分からない子にはくり返し教えることが必要でしょう。」と返ってきた。

★子どもの席は異年齢4～5人のグループ席。グループでの学習は、おしゃべりや依存の状態になりがちかと考えたが、ここではそうなっていなかった。それぞれやっている内容がちがうし、異年齢グループのため、年長



同年齢の子どもへの一斉学習



わかるまで何度でも説明を聞く



答え合わせも自分で

の子どもが年長としての自負を持って、自然とリーダー的役割を果たしていた。(年長の子どもが自分の仕事に集中して取り組んでいることが自然と手本となるなど。)

★音読の時間が大事にされていた。保護者がボランティアで入ることもしばしばある。ペアで、二人で選んだ本を1ページ交代で読んでいく方法をとっていた。このペアは異年齢で組まれており、年長の子は自信を持って年少の子に読み聞かせるように読み年少の子は少し難しい本を年長の子に所々教わりながら音読する。

★教室にも本はたくさん置いてあったが、図書コーナーが学校にあり、そこからも本を選んできていた。本の背に、その本のレベルを示した数字が貼ってあり、それを手がかりに目標を持って音読に挑戦していくそう。図書コーナーは日本の図書室に比べると質素なものだった。しかし、そこにある本はどれもじっくり読み込まれていた。

★7、8歳の子どもが1時間15分もの時間を、自分の課題に集中して取り組んでいるのにはとくに驚いた。そこで、12歳の子どもに尋ねた。「あなたたちは、勉強がしたくて、自分たちでどんどんしているように見えるけど、そうなの?」と。すると、「しないといけなからしている」との返事が返ってきた。「でも、何からするか、どんな方法でするかを選ぶことができる。自分で決めることができる。だからそう見えるかもしれない。勉強は嫌いじゃない」と彼女らは付け加えた。勉強はしないといけなものという捉えは日本の子どもと同じだが、させられるものではなく自分でするものにとらえているところが大きな違いだ。

★学習とは、じっと教えてもらうものではなく、自分で取り組んでいくものだった。教師の専門性は子どもたちにどんな課題を出すかにある。量が多すぎたり、難しすぎると完成させきれずに意欲を持ってなくなる子どもがでる。また、量が少なすぎたり、簡単すぎると退屈してしまう子どもが出る。その子どもの発達段階の少し上の段階の課題を与えなければならない。この部分の質が重要なのだ。オランダイエナプランでは、これまでの経験の蓄積や教材の開発を、個々人がバラバラにするのではなく、ネットワークでつながり、研修を重ねることで、質を高めているのだそう。

★学習の中で、自主性は常に鍛えられていた。後のミュンヘン大学での研修で、講師のフレークさんが、子どもをじっと待たせる受け身の状態ばかりにさせてはいけない。それは、子どもをただの消費者にしてしまうことだ。それも無批判な消費者に。といわれた言葉はとても印象的だった。



ペアでの音読。好きな場所で好きなスタイルで



質問に答えてくれた二人

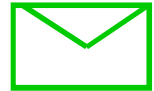


高学年クラスの数学の学習風景

## ◆◆◆ リヒテルズ直子の 質問箱 ◆◆◆



**Q1:** PISAの報告によると、早期に進路を分けるやり方は子どもの成長にポジティブな影響を与えないというリサーチがあるようですが、オランダでは中等教育のあり方について、今どのような議論があるのでしょうか。

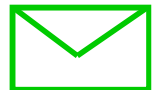


### A:リヒテルズ直子より

ヨーロッパのシステムは、伝統的に中等教育進学時点で、進路が完全に分かれるものでした。それが、70年代に修正され、おおざっぱにはわかるけれども、様子を見ながら、または、本人の意欲によって、他のコースに比較的容易に移動できるものとなりました。ですので、こういう議論は、70年代 初めの議論であったといえます。日本やアメリカのような6.3.3制は、競争によって落ちこぼれを生みます。また、それぞれの子ども の適性を考えず、すべての子どもに一律に同じ教育内容を与えるという問題もあります。オランダの場合は、中学3年生で、一応、進路コースが確定しますが、それぞれのコースの最終目標 が明確ですので、学校は、そのレベルに到達するように方法を工夫します。そして、一旦、一つのレベルを卒業できれば、その1段階上のレベルに移行できます。国は、中等教育終了までは、教育を無償で保証しています。オランダの学校教育制度の詳細については、「オランダの教育——多様性が一人一人の子どもを育てる」(平凡社)と「今開国の時、ニッポンの教育」(ほんの木)を参照してください。

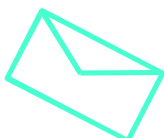


**Q2:** 到達目標を決めて、そこへ引き上げるという事ですが、実際に落第する生徒はいるのでしょうか。どのくらいの割合ですか。



### A:リヒテルズ直子より

もともとヨーロッパの学校は、学年制で、小学校から、毎年落第がありました。それは、画一斉授業だったからです。それは、国にとっても子供本人にとっても無駄の多い制度でした。そこで、目標を小学校団体の終了時点の目標を定めることにより、それまでの、8年間(4~12歳)の教育方法に柔軟性を持たせたのです。つまり、一人一人の子ども のニーズと店舗に合わせて、目標に向かっていく際の道筋にいろいろなやり方が取れる形にしたのです。その時に、イエナプラン教育やモンテッソーリ教育が採用している異年齢学級のやり方が大変注目されました。つまり、基本は、到達目標は、まさに、落第する生徒を減らすための施策であったといえます。そして、その施策は、教員の自由裁量権の拡大と、この教員を支える教育サポート機関(現職教員へのトレーニング)です。この間の事情は、「オランダの個別教育はなぜ成功したのか——イエナプラン教育に学ぶ」(平凡社)を参照してください。



イエナプラン教育に関するご質問を募集しております。  
下記のメールアドレスまで、お気軽にご連絡ください！  
info@japanjenaplan.org

## ■お知らせ■

早いもので、ニュースレターも11号を迎えました。みなさまの励ましに本当に感謝しております。これからも、『かけがえのないユニークな』私たち一人一人が、成長していける教育環境をつくっていきましょう！今後ともどうぞよろしくお願いいたします。

※重要なお知らせがございますのでご確認ください。

- ・より多くの方にイエナプラン教育を知っていただくため、来年度より年会費を3000円にすることになりました。既にご入会の方は、4年会員とさせていただきますのでご了承ください。(2014年10月まで会費はかかりません)  
ご不明な点は事務局までお問合せ下さい。 [info@japanjenaplan.org](mailto:info@japanjenaplan.org)
- ・ニュースレターが季刊誌になります。(10・1・4・7月)
- ・11月20日(日)、国立青少年センター(代々木オリンピックセンター)にて、日本イエナプラン教育協会総会と、リヒテルズ直子氏ワークショップ(ワールド・オリエンテーションがテーマ)を開催いたします。詳細は次号ニュースレターやメーリングリストにてお伝えいたします。
- ・協会HPの会員専用ページ・ライブラリーに『ローズガーデン』(2001年に、オランダイエナプラン協会の指導的なメンバーが、協働で「理想」のイエナプラン校の姿を著したものを)を第3章までアップしました。ぜひご覧下さい！ <http://www.japanjenaplan.org/index.html>

### ★ニュースレターへのご意見ご感想をお待ちしております。

より良いニュースレターの制作のためにも、みなさまのご意見ご感想をお聞かせください。

[info@japanjenaplan.org](mailto:info@japanjenaplan.org)

みなさんのご意見・ご感想を心よりお待ちしております。

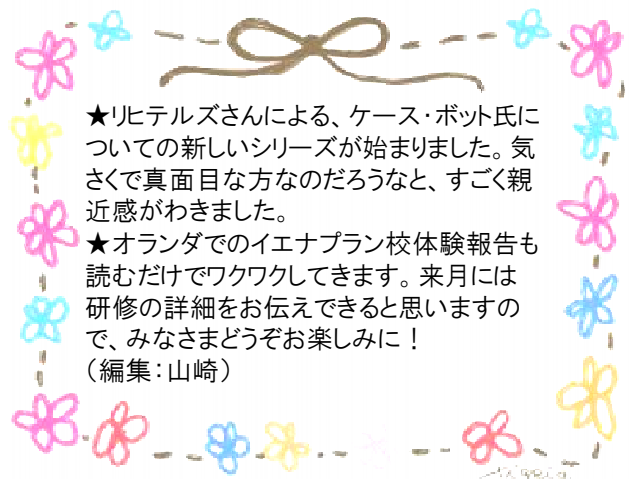
### ★アンケートの質問を【質問箱】に掲載しています。

8月4日のワークショップで、頂いた質問を【リヒテルズ直子の質問箱】に掲載しました！本を読んで…実践してみても…ふと感じた疑問やご質問を、ぜひお寄せ下さい！！

[info@japanjenaplan.org](mailto:info@japanjenaplan.org)

### ★各支部のご案内

- 東京支部 [info@japanjenaplan.org](mailto:info@japanjenaplan.org)
- 千葉支部 [chiba@japanjenaplan.org](mailto:chiba@japanjenaplan.org)
- 埼玉支部 [saitama@japanjenaplan.org](mailto:saitama@japanjenaplan.org)
- 京都支部 [kyoto@japanjenaplan.org](mailto:kyoto@japanjenaplan.org)
- 福岡支部 [fukuoka@japanjenaplan.org](mailto:fukuoka@japanjenaplan.org)



★リヒテルズさんによる、ケース・ポット氏についての新しいシリーズが始まりました。気さくで真面目な方なのだろうと、すごく親近感がわきました。

★オランダでのイエナプラン校体験報告も読むだけでワクワクしてきます。来月には研修の詳細をお伝えできると思いますので、みなさまどうぞお楽しみに！  
(編集:山崎)